

## ベトナムの電力事情

石川 幸

### <はじめに>

皆様もご存知かと思いますが、年々ベトナムは経済成長を遂げています。そこで今回、取り上げたいのは経済成長には切っても切り離すことができない電力についてです。人口増加や生活水準の向上、更には経済の活性化等を見ても電力と言う支え無しに、これ以上のベトナムの経済成長は見込めません。

### <発電所の形態>

ベトナムには電力を供給する会社が大きく分けて2種類存在しています。1つ目は、ベトナム電力総公社（EVN）と呼ばれる国営の発電所です。2つ目は、独立発電事業者（IPP）と呼ばれるEVNに自家発電した電力を販売する発電所です。発電施設の開発は莫大な資金などが必要とすることは明白で、それゆえに、依然としてEVNが電力の大半を賄っているのが現状です。ちなみに、2015年にEVN、IPPを合わせて全国129カ所に発電所があるとされています。

発電量に目を向けると、ベトナムの2015年の総発電量は145,540GWh（ギガワット）とされています。各国の同時期の発電量は、日本が1,053,634GWh、インドネシア28,550GWh、タイが177,580GWhであることを鑑みると、ベトナムの発電能力の伸びしろはあるように思います。

### <発電形態>

2015年のデータによりますと、天然ガス火力発電が28.9%、石炭火力発電が34.4%、次いで水力発電が34.2%を占めており、その大半を火力発電に依存していることが分かります。しかし、一方で水力発電の存在も看過は出来ません。2016年の日本における水力発電の割合が7.5%であることを加味すると、ベトナムの数字は非常に大きいです。これは熱帯モンスーン気候に属し、かつ水力発電に適した地形が多く、それゆえに水力発電所が多く点在するためです。また、原子力発電所も現状ではまだ無いため、クリーンエネルギーという点においては優

秀であるとも言えます。

### <電力不足>

しかし、クリーンエネルギーを大きく利用している点に関しては一方、リスクもあります。特に、水力発電に関しては天候に大きく左右されるため、発電量の予測が立てづらいからです。また、南部は乾季と雨季に分かれているため、通年での水力発電にも限界があります。事実、特にホーチミン市近郊では乾季になると例年、電力不足が嘆かれており、しばしば計画停電が実施されることもあります。経済的損失や国民生活を脅かすこの状況を改善するためにも、政府は火力発電などに注力することを発表していますが、金銭的な面からも現実的かどうかは疑問のところではあります。

### <今後の展望>

現状として、この状況を悪く捉える見方も出来ませんが、外資企業にとってはある意味、投資のチャンスとして捉えることも出来ます。上記のIPPに関して、近年では日本の総合商社の丸紅が2016年に大型石炭火力発電プロジェクトに投資をし、ベトナムの電力業界に参入しようとする動きがあります。また、未開の土地を有効活用するためにもソーラー発電を開発する企業も近年は増えています。各種プラント・施設に関するコンサルタントを手掛ける日系企業の日揮は南中部高原地方のザライ省に約75ヘクタールのメガソーラー発電所を開発予定です。日本における発電技術は世界でも指折りのものがあり、かつ国外への受注に向けて邁進しています。そのような状況からも、エネルギー事情、殊に電力に関しては今後もベトナムと深い関係を築ける土壤はあるように感じられます。